

個別性を重視し集団力動を生かした早期介入アプローチ イルボスコにおける復学支援の実践報告

田中 友紀¹⁾ 石田 明菜¹⁾ 大迫 加奈²⁾
船渡川智之¹⁾ 根本 隆洋¹⁾ 水野 雅文¹⁾

¹⁾東邦大学医学部精神神経医学講座 (大森)

²⁾東邦大学医療センター大森病院看護部

要約：東邦大学医療センター大森病院精神神経科デイケア「イルボスコ」では15～30歳、発症後5年以内の方を治療対象とし、治療臨界期での集中的治療を行っており、①早期介入により精神病発症危険状態(at-risk mental state：ARMS)から顕在発症への進展を頓挫させること、②発症後間もない初回エピソード統合失調症(first episode schizophrenia：FES)に対する社会復帰を目標とする積極的なりハビリテーションの2点を治療目的としている。本稿ではイルボスコでの取り組みにより復学と就労が可能となった症例を紹介する。本例はイルボスコの集団活動に参加し、利用者と協力して物事を行うことによりさまざまな役割を達成し、多くの成功体験を積み重ね自己効力感の向上につながった結果、大学への復学、アルバイト就労を達成した。早期に集団体験を中心とした集中的な心理社会的治療を行うことで就学や就労など社会参加の促進が可能であることが示唆された。

東邦医学会誌 63(3)：186-188, 2016

KEYWORDS：early intervention, first episode, schizophrenia

東邦大学医療センター大森病院精神神経科デイケア「イルボスコ」では15～30歳の精神病発症危険状態(at-risk mental state：ARMS)および発症後5年以内の初回エピソード統合失調症(first episode schizophrenia：FES)を対象とし、治療臨界期(critical period)での集中的治療を行っている^{1,2)}。活動の目的は、ARMSから顕在発症への頓挫、発症後間もないFESへの社会復帰を目標とする積極的なりハビリテーションの2点である。治療プログラムは、ツールやゲームを用いた認知機能トレーニング、成長過程で経験し得なかった集団体験を目的としたグループワーク、疾病管理や生活支援等を中心とした心理教育、ロールプレイやシートを用いた対人関係技能訓練、就労・就学等社会復帰支援などを実施している。また、思春期・青年期前期にある対象者の状態像や成長段階の多様さに対応するため個別性を重視し、流行や年代特性にも配慮している。

本稿では、イルボスコでの取り組みにより大学通学とアルバイト就労が可能となった症例を紹介する。なお、匿名化ほか、プライバシーの保護に留意した。

症例呈示

症例：20歳代、男性

診断：統合失調症

生活歴および現病歴：同胞2名中の第1子として出生。遺伝負因、言語運動発達の遅滞無し。元来おとなしい性格で、高校1年生頃より「クラスメイトからの悪口」の幻聴、被害関係妄想、被注察感が出現した。X-1年大学に進学するもクラスメイトからの悪口が気になり休学。同年9月に前医を受診し、統合失調症と診断され、リスパリドンの投与が開始された。幻覚妄想が残存する中でX年4月復学した状態で当科受診し、通学継続目的でイルボスコの利

1, 2) 〒143-8541 東京都大田区大森西6-11-1
受付：2016年8月29日
DOI: 10.14994/tohoigaku.2016.r036

東邦医学会雑誌 第63巻第3号、2016年9月1日
ISSN 0040-8670, CODEN: TOIZAG

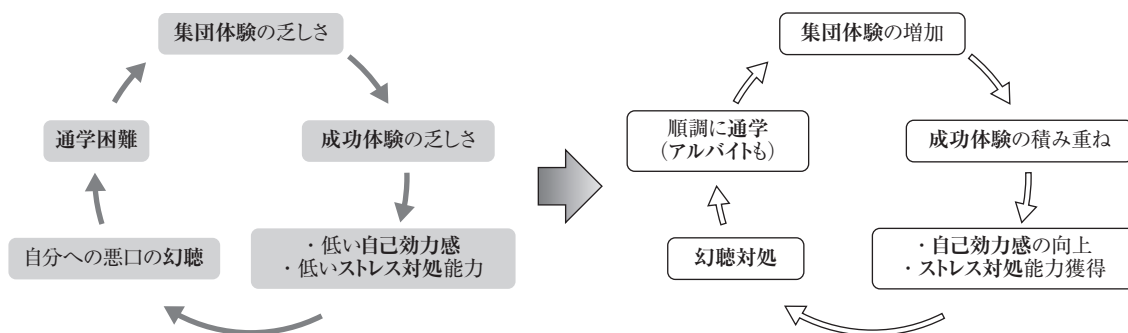


図1 負の円環から正の円環へ

用を開始した。

治療経過

開始時評価：幼少時から同世代との交流や集団での体験が少なかった。そのため他者と協力して物事を成し遂げるなどの成功体験を得る機会が少なく、自信も無く自己効力感是非常に低い状態であった。また不安を乗り越える力やストレス対処能力が低く、大学に復学したが被害的な内容の幻聴により通学が困難になっていた。また集中力や記憶力、言語・思考の流暢性の低下も認められた。そしてこれらの技能の乏しさについて本人の自覚も欠けていた。精神症状、認知機能障害、自己効力感の低下によりさらに集団体験を遠ざけるという負の円環の中にいる状況であった(図1)。母親が「本人が過ごしやすいように」と先回りして行動する傾向も認められ、そのような母親の関わりが本人の自立や成長に阻害的に働いていると考えた。

目標設定・治療計画：リハビリテーションゴールを本人の希望より「通学安定」とした。また「人と話せるようになりたい」との希望があり、長期目標を「集団内で過剰に緊張せず過ごせるようになる」とした。リハビリテーションプランを「認知機能向上」「集団内環境調整」「ストレス対処拡大」「疾患教育」「家族介入」の観点より作成した。

介入経過 I (開始～3カ月)「うつむいて過ごす」：プログラム参加時、認知機能ゲームの場面では注意力の乏しさより教示を聞き逃すことが多く、自発的な発話も乏しかった。イルボスコ内ではうつむいて立ち尽くす姿が目立った。しかし、イルボスコのメンバー達からの声かけにより、安心して過ごせる場が提供されたことで、本人も受動的ではあるものの次第に会話を交わすようになった。スタッフとの個別面接の中では「大学でもイルボスコでも休み時間の過ごし方がわからない」と話し、被害関係妄想がそのような時間に自覚される傾向にあった。その対策としてイルボスコでの昼休みにスタッフが話し相手をコーディネートし、コミュニケーションの練習を行うなど実践練習を重ねた。母親・本人・スタッフで定期的に家族面接を行う中で、母

親が本人を心配するあまり、過剰に連絡を取っている状況が確認された。母親の過干渉が本人の対処技能の向上を阻害している可能性について共有し「本人の自立のためには、自分で決めて自分で行動することが大切」であることを確認し合った。

介入経過 II (4～9カ月)「メンバーと出かける」：認知機能ゲームやミーティング、イベント準備の話し合いの場面などで自らの考えを表出できるようになり、自発性の向上を認めた。ペーパーチャレラン³⁾の時間でも問題を適切に聞き取り、解答の導き方を工夫し、高得点を獲得できるようになった。またメンバーに誘われ遊園地やカラオケに行くなど対人交流が拡大した。しかし、依然として対人緊張は強く、大学での友達を作ることはできなかった。また学生相談室教員との相談も滞っていた。そのため実際の相談場面を想定した面接を繰り返し行った。家族面接では引き続き「本人の自立のために家族が本人を見守ることが重要」であることを確認し、母親へ本人との状況確認を減らすよう勧めた。

介入経過 III (10カ月～イルボスコ卒業)「人前で話す、皆を笑わせる」：自発性がさらに向上し、面白くユーモアのある発言で皆を笑わせるようになり、司会進行役なども積極的に引き受けた。また自分が受けてきたように新メンバーの世話も行い、メンバー達にとっては頼もしい先輩的存在となっていった。大学での友人は依然として作れないがイルボスコ以外の自助グループに参加した。また自ら学生相談室へ出向き担当教員と定期的に相談できるようになった。個別面接では「前に出て課題発表を行う場面が緊張する」と話していたため、イルボスコを大学の教室に見立て、メンバー達の協力を得て発表練習を繰り返し行った。また、慣れない他者との交流を実践する場として、作業療法学科学生との会話練習を行い、大学での困難な場面についてロールプレイを行った。本人が大学生活を順調に送れるようになってきたことで、母親は不安や本人への状況確認が減少し、母親自身の仕事も再開した。母親へは本人と

適切な距離を保っていることをフィードバックした。

介入経過 IV (イルボスコ卒業～現在)「通学・アルバイト就労開始」: イルボスコ卒業後も通学を継続し、大学でも名前で呼び合う友達ができ、成績も優秀であり、3年生次後期よりゼミに所属し、教育実習の準備も始めた。さらにアルバイトも開始したが、「すごく楽しい」と順調に継続しており、自助グループでも講演会に登壇するなど積極的に活動している。

アセスメント結果 (開始時から利用 15 カ月時点での変化): 利用開始時と比べ陽性・陰性症状評価尺度 (Positive and Negative Syndrome Scale : PANSS) 上の精神症状、Fluency Test, Letter Cancellation Test をはじめとした各種認知機能検査上の認知機能、World Health Organization Quality of Life (WHO-QOL) 上の主観的 QOL の改善を認めた。社会機能評価尺度 (Social Functioning Scale : SFS) 総得点においても社会機能の著明な改善を認め、友人数も 0 名から 15 名へと増加し、対人交流や行動範囲の拡大がみられた。

考 察

『デイケアには表には出ないメンバー同士の仲間集団などの裏集団もあり、デイケアにおける集団力動は幾重にも絡み合っているこれらの集団間の関係性や連携の影響を受けている。したがって、デイケアは集団の要素を十分に活かして体験を積んだり、メンバー間のコミュニケーション促進させながら、社会性を獲得する場所という特性を活かした総合プログラムの提供が求められる。』と山根ほかは

報告している⁴⁾。本例においてもイルボスコの集団活動に参加し、他者と協力して物事を行い、さまざまな役割を達成する中で、成功体験を積み重ね、「自分は役に立つ」という自己効力感の向上につながった。また困難に立ち向かえるようになるなどのストレス対処技能も獲得し、幻聴に対しても適切に対処することが可能となった。それにより大学生活を安定して送り、アルバイト就労などより、広い社会に所属できるようになった。

結 語

集団体験を中心とした集中的な心理社会的治療を行うことで、安定した就学・就労を可能とした統合失調症の 1 例を経験した。統合失調症においては早期に集団力動を適切に用いることでコミュニケーション能力が向上し、自己効力感の育みを通して、社会復帰の促進が可能なが示唆された。

文 献

- 1) 船渡川智之, 根本隆洋, 武士清昭, ほか: デイケア施設を活用した包括的早期介入の試み: イルボスコ. 精神誌 115:154-159, 2013
- 2) Nemoto T, Funatogawa T, Takeshi K, et al: Clinical practice at a multi-dimensional treatment centre for individuals with early psychosis in japan. *East Asian Arch Psychiatry* 22: 110-113, 2012
- 3) 伊藤亮介: ペーパーチャレラン全集 (向山洋一監修), 東京教育技術研究所, 東京, 2008
- 4) 山根 寛, 香山明美, 加藤寿宏, ほか: 精神認知機能障害と集団プログラム, ひとと集団・場 第 2 版 (鎌倉矩子, ほか編) p130-146. 三輪書店, 東京, 2007